

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：34428
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26770175
 研究課題名(和文) フレイジオロジーの考え方を援用した英語の語彙補文・フレーズ補文の記述的研究

 研究課題名(英文) A phraseological approach to complements of lexical items and phrases

 研究代表者
 住吉 誠 (Sumiyoshi, Makoto)

 摂南大学・外国語学部・准教授

 研究者番号：10441106
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フレイジオロジーの考え方を援用しながら現代英語の語やフレーズが従える補文の実態を明らかにすることを目指した。扱った語やフレーズは多いが、例えば、share + that節は「教える」「合意する」の意味を持つこと、share と同義のフレーズである have in common がthat節を取ると「...という共通点をもつ」を意味することを明らかにした。特にフレーズ補文については、take turns などの歴史的变化を集中して扱い、その変化の過程が Rohdenburg (2006) の提唱する「大補文推移」の流れに当てはまることを明らかにし、フレーズ補文の実態解明を目指した。

研究成果の概要(英文)：This is an empirical investigation of the English complementation system, with a special attention to the complements of words and phrases that have not been the focus of discussion so far. Taking a phraseological approach, this study deals with a wide variety of lexical items and phrases used with complements. For example, the verb "share" and the phrase "have in common" can be followed by "that"-clauses. "Share + that-clause" has a similar meaning to "convey X to somebody else by sharing information," while "have in common + that-clause" shows that the referents in the subject share X. In both cases, X is described in "that"-clauses. Moreover, the behavior of phrase complements such as "take turns + to V/V-ing," "lend X a hand + to V/(in) V-ing," and "cannot bear + to V/V-ing/that-clause" is empirically investigated in terms of the Great Complement Shift advocated by Rohdenburg (2006).

研究分野：英語学

キーワード：補文 フレーズ フレイジオロジー

1. 研究開始当初の背景

(1)【英語の補文研究の見直しの動き】認知言語学の発展、フレイジオロジー (Phraseology) の台頭、結合価理論 (Valency Theory) の進展などともなっていて、それぞれの立場から、英語の動詞/形容詞/名詞といった語彙がどのような補文 (本課題研究では「語彙補文」と呼ぶ) をとるのかということについて見直しが進んでいた。研究開始当初は、例えば、Egan (2008) (認知言語学)、Goldberg (2011) (構文文法)、Faulhaber (2011) (結合価理論)、Herbst (2009) (フレイジオロジーと結合価理論の融合) などがあつた。この見直しの大きな理由のひとつは、コーパスの大量のデータから、ある語が従来考えられた以上に様々な補文と共起することがわかったためである。

(2)【英語の多様性の認識】コーパスの豊富な言語資料から、語彙補文の実態が複雑で規則化が難しいということも再認識され始めていた (De Smet 2013)。英語の実態を詳細に見ると、Levin (1993) や Dixon (2005) が主張するような「意味が形を決める」という考えでは、語彙補文の語特融 (item-specific) な振る舞いを説明できない。Herbst et al. (2004) (結合価理論)、Francis et al. (1999) (フレイジオロジー) のように、それぞれの立場から語彙補文のリストが作成されていたが、これらの記述は一致していなかった。

(3)【研究代表者のこれまでの研究成果】研究代表者は実証的な英語語法研究の一環として、語彙補文、特に that 節を後続させる英語の動詞の考察を行い、理論的・規範的な立場から that 節をとらないとされる動詞が、実はかなり柔軟に that 節と共起することを明らかにしていた。*nod + that 節や *express + that 節が不可という判断は、英語の実態を反映したものではない (住吉 1999、Sumiyoshi 2003)。実証的な英語語法研究は、語の個別の特徴を扱うフレイジオロジーとの親和性も高く、フレイジオロジーの立場から英語の語彙補文やフレーズ補文について多くの新しい知見を明らかにできる可能性があつた。

2. 研究の目的

(1)【内省判断と英語の実態の見直し】理論言語学者の *She demanded him to do it. という内省による文法性の判断は、日本の英和辞典の記述にも取り入れられた。しかし、She demanded him to tell her where the boy was. のような例がコーパスに見られる。この demand の補文については、語彙補文のリストも記述が一致していないことがあつた。語彙補文についての直観による判断と、リストや実例との比較を集中的に行うことで見直しを進めるのが一つの目的であ

つた。

(2)【「フレーズ補文」の発掘】have in common/make sure/keep one's fingers crossed/shake one's head といったようなフレーズも、to 不定詞や that 節などの補文をとる (Sumiyoshi 2013)。このようなフレーズ補文は、have the idea + that 節などの形を除けば、これまであまり関心が払われてこなかったため、その実態が明らかになっていない。このようなフレーズ補文の発掘を精力的に行うことも目的に含まれていた。

(3)【補文を決定する要因についての解明】語やフレーズがどのような補文をとるかを「意味が統語形式を決める」という考えですべて説明できるわけではない。類語辞典では意味的に have in common = share とされるが、この二つがどのような補文をとり、それがどのような動機づけによるものかは明らかになっていなかった。補文の実態は意味の点から規則化できない個別の特徴と考えるべき部分も多い。補文構造を含めた一連の語の連鎖をフレーズと考えるフレイジオロジーの考え方を援用しながら、「動詞 + to 不定詞/that 節」といった語彙補文だけでなく、have in common + that 節や He shook his head that he didn't know. のようなフレーズ補文も扱い、語彙・フレーズと補文の共起に意味以外のどのような要因が関わるのかを明らかにするのも目的であつた。

3. 研究の方法

本研究課題で使用するデータとして、これまで言語学者が提示してきた内省による補文の文法性判断のデータの収集、フレーズ補文のための辞書からのフレーズ収集、実際に使用された生のデータの収集を行った。基本的には手作業で収集した例、辞書や論文から収集した例、コーパスからの例が本研究のデータとなった。

Voice of America やペーパーバックから手作業で例を集めた。また、コーパスはウェブ上で公開されている Corpus of Contemporary American English などを使用した。さらに、これまで日本の英語学者の手によって編纂された『英語正誤辞典』『現代英語正誤辞典』などを補助的に活用しながら、補文を扱った関連論文や著書を集中的に読み解いて一つずつデータを収集した。フレーズの収集のために、各種辞書を幅広く渉猟した。やみくもにデータソースを検索するのではなく、「辞書記述周りコーパス行き」という方法をとつた。

このような方法で収集したデータを、特定の理論によらず、実証的な手法により分析を行った。特に、一連の語の連鎖をフレーズと考えるフレイジオロジーの考え方を援用して分析を行った。語の連鎖はフレーズ全体としてある意味を表すが、それを構成する個々

の語の意味や統語的特徴は必ずしもフレーズ全体の振る舞いに反映されない (syntactic non-compositionality / semantic non-compositionality)。この考え方を語彙補文・フレーズ補文に適用して、新たな知見を発掘することを目指した。

4. 研究成果

本研究課題の成果は大きく分けると、新しい事実の発掘、新しい知見の提示、従来の研究成果の見直しという三つに分けることができる。これらはすべて、フレイジオロジーの考え方にもとづいてなされたものである。例えば、これまで指摘のなかった動詞 share が that 節をとること、さらに意味的に類似する have in common が that 節を従えた場合とは意味が異なることなど興味深い事実を発掘した。また、新しい知見としては、フレーズ take turns がとる補文の歴史的推移 (to 不定詞から動名詞へ) を明らかにし、フレーズ補文の実態解明に一步近づくことができた。さらに、これまでの補文についての研究成果をフレイジオロジーの観点から見直して、より一貫性のある説明ができることを明らかにした。以下、本研究課題の主な成果を個別に述べていく。

(1) フレーズ補文を発掘する過程で、フレーズを構成する各語のとる補文とフレーズ全体がとる補文が一致しないことについては、このようなフレーズが統語的に非合成的、意味的に非合成的であること (syntactic non-compositionality / semantic non-compositionality) というフレイジオロジーの代表的な考え方を援用する必要があることを主張し、具体的な例を示しながら、フレイジオロジーの国際学会である Europhras 2014 にて口頭発表を行った。これは本研究課題が研究対象とするフレーズ補文の実態解明にフレイジオロジーの考えが有効であることを示したものである。

(2) コーパス、特に Corpus of Historical American English などからフレーズの例を収集する過程において、cannot bear / lend + X + a hand / take turns といったフレーズ補文は時代によって、to 不定詞を多く従えたり、動名詞を多く従えたりすることが判明した。例えば take turns は現代英語では動名詞と多く共起するようであるが、時代をさかのぼると to 不定詞のほうが優勢形であった。これについて、語彙補文の歴史的な変化を扱った Rohdenburg (2006) の大補文推移の考え方にもとづいて、フレーズ補文の体系にもこのような補文推移が当てはまることを指摘し、英語の実態の一端を明らかにした。このような成果について、現代英語の国際学会である 6th Biennial International Conference of Linguistics of Contemporary English にて口頭発表を行った。

(3) 研究代表者がこれまで行ってきた語彙補文 (例: nod + that 節) について、フレイジオロジーだけでなく、統語的融合といった観点からも見直しが可能であることを、International Workshop on Cognitive Grammar and Usage-Based Linguistics にて発表した。

(4) 従来 have the idea + that 節といったフレーズ補文は、have the idea が意味的に know と類似するので that 節を従えることができることとされてきた。このような考え方は、語彙とフレーズの意味的な類似性に注目したものであるが、補文をとるフレーズが必ずしも意味的に対応する語を持っているわけではない。また、意味的に似たような場合でも share が that 節をとった場合と have in common が that 節をとった場合は、意味的に異なる使い方がされている。例えば We have in common that we were both deprived. は「お互いに恵まれていなかったという共通点がある」ということであるが、share が that 節をとった場合は、「(情報を分かち合うことで) ...と教える ; (同じ意見を共有する、すわなち) ...という同じ意見を持っている」という意味を表す。例えば、He then shared that he had brought these poles with him... は「これらのポールを持ってきたと教えてくれた」という意味になる。このような知見はこれまで指摘されてこなかったもので、本研究課題の一つの大きな成果である。

(5) 研究代表者がこれまで発掘してきた語彙補文については 身振り動詞 + that 節 / express + that 節 / 発話様態動詞 + that 節 / apologize + that 節などがあるが、これらをフレイジオロジーの考え方を援用しながら全体的、統一的に見直しをはかった。また notice がとる補文のパタンについても同様に見直しを図り、フレイジオロジーの考え方で be + noticed + V-ing などのパタンについての考察を行った。このような一連の見直しは、シリーズ「英文法を解き明かす 現代英語の文法と語法」の中の一冊である『談話のことば2 規範からの解放』の一部に収録され、フレイジオロジー的アプローチによる語法研究として結実した。

以上のような成果をまとめていく過程で、補文がすべて意味によって決まるのではなく、一部の補文は意味に関係なく連鎖として脳内辞書に蓄積されている可能性があることを見ることができた。このような考え方は、新たな事実の発掘とともに、補文研究に新たな視点を導入したと思う。また、語彙補文、フレーズ補文の多様性を明らかにしたこと、フレイジオロジーの考え方が補文の研究に援用できることを示すことができたのは大きな成果であった。

また、単著や講演などでの口頭発表で本研

究課題の結果に触れたことで、成果を一般に還元できたことは大きなことであった。

<引用文献>

De Smet, Hendrik, 2013, *Spreading Patterns: Diffusional Change in the English System of Complementation*, Oxford University Press.

Dixon, Robert, M. W., 2005, *A Semantic Approach to English Grammar*, Oxford University Press.

Egan, Thomas, 2008, *Non-finite Complementation: A Usage-based Study of Infinitive and -ing Clauses in English*, Rodopi.

Faulhaber, Susen, 2011, *Verb Valency Patterns: A Challenge for Semantics-Based Accounts*, Mouton.

Francis, Gill et al., 1999, *Collins COBUILD Grammar Patterns 1: VERBS*, HarperCollins
Goldberg, Adele, E., 2011, Meaning Arises from Words, Context, and Phrasal Constructions, 317-329, *Zeitschrift Für Anglistik und Amerikanistik*, 59.4.

Herbst, Thomas, 2009, Valency—item-specificity and idiom principle, 49-68, *Exploring the Lexis-Grammar Interface*, ed. by Römer, Ute and Rainer Schulze, John Benjamins.

Herbst, Thomas et al., 2004, *A Valency Dictionary of English*, Mouton.

Levin, Beth, 1993, *Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, Chicago University Press.

Rohdenburg, G., 2006, The role of functional constraints in the evolution of the English complementation system, 143-166, *Syntax, Style and Grammatical Norms*, ed. by Dalton-Puffer, C. et al., Peter Lang.

住吉 誠, 1999, 動詞の意味的特徴とthat節—nod + that節を中心に—, 183-198, 『英語語法文法研究』第6号, 開拓社.

Sumiyoshi, Makoto, 2003, *Post-predicate that-clauses and that-taking verbs in present-day English: A descriptive approach*, Kobe-city University of Foreign Studies.

Sumiyoshi, Makoto, 2013, A corpus-based study on phrases and their valency patterns: Toward the improvement of dictionaries, 272-277, *Proceedings of the 8th Asialex International Conference: Lexicography and Dictionaries in the Information Age*.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

住吉 誠、フレーズと補文—フレーズ補文の実態解明をめざして—、『*撰大人文科学*』第

24号、2017、pp.107-126

https://setsunan.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=952&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1

〔学会発表〕(計6件)

住吉 誠、規範と英語の実態—動詞補部を中心に、2017、大学英語教育学会(JACET)関西支部2016年度第3回支部講演会(於:大阪電気通信大学)

住吉 誠、2016、英語の語法の「機微」を探る、関西英語語法文法研究会第33回例会(於:関西学院大学)

住吉 誠、2016、英語語法研究再考:さらによりよい貢献をめざして、関西英語語法文法研究会第32回例会(於:関西学院大学)

Makoto Sumiyoshi, 2016, Syntactic blends: In cases of verb complements, International Workshop on Cognitive Grammar and Usage-Based Linguistics (at Osaka University)

Makoto Sumiyoshi, 2015, How Great is the Great Complementation Shift? In cases of phrase complementation, 6th Biennial International Conference of Linguistics of Contemporary English (at University of Wisconsin-Madison, USA)

Makoto Sumiyoshi, 2014, Phrases and their emancipation from part-of-speech rules, EuroPhras 2014 (at University of Paris Sorbonne, Paris, France)

〔図書〕(計1件)

住吉 誠、研究社、『*談話のことは2 規範からの解放*』、2016、245

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住吉 誠 (SUMIYOSHI, Makoto)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10441106

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()